

地名鯨井の由来

新編式武蔵風土記によれば

「鯨井村は郡(高麗郡)の東、入間郡の郡界にして三芳郷に属せり。

往昔、久次郎なるもの草創して居しゆいに、久次郎居村と唱へしを、何時の頃からか、今の文字に書きかえしよし。或いは久志羅井、とも書きせり」とある

この僅か三行の中に、地名鯨井に関する、すべての意味が包み込まれていると思うがそれでは何時の頃から正式名として、鯨井なる地名が呼称されたかと云うと

「永禄2年、1559年、鯨井、犬竹と始めて文書にあらはれた」以上の記事が初めてで、郷土歴史研究の盛んなる現在においても、地名の由来、又創始期はつかみきれないでいるのが、実情である。しかし、鯨井史収録に当たり、現在考察される限りの内容は、書くのが至当と思われるので大要を書き遺したいと思います。

先ず久次郎なる人物であるが、これには、神山久次郎、神田久次郎の二説がありますので、其の周辺についてのべて見ます。神山久次郎なる人物ですが、小田原・後北条の家臣で鯨井に住んだ人であろうと云う以外に、勿論証拠を以って示せません。

又 神田久次郎なる人物ですが、戦国時代前より、現在の金堀橋周辺にて、刀鎗の製造に携わり又、日枝神社の御神体に関し云々、「田幡幸吉氏聞き語り」の文が集録されていますが、この事についても、確たるものはなく、唯、神田家の云い伝えとして、古老が、神田家の祖先より度々聞かされ今日に至っているのです。

武蔵風土記についても、当時の役人が土地の人達からの云い伝えを聞き取りそのままのせたとと思われるので、今の考え方と大差なく、唯、久次郎なる人物が、村の代名詞になるほど勢力を張った時代があったと云う事は、否めない事実に近い事だと思われる。次に、久志羅井の呼称ですが、高麗郡鯨井村と、正式な地名の時代が鯨井には長く続いたわけで朝鮮帰化人と、何等か関係のあるような字体にも見えて来ますが、むしろ、土地名を漢字的に「美化して表した様相が濃いような感じが強く、これについても勿論何の手掛かりもつかめていないのが実情です

万葉

なぐわし
名細き 稲見の海の奥津浪 千重に隠りぬ やまと島根は

(作者 柿本人麻呂)

なぐわし
名細き 吉野の山は かけとも 大御門ゆ 雲居にそ 遠くありける

(作者不明)

■ 上戸、鯨井あたりを三芳野の里と称していた(在原業平・伊勢物語)そこで芳野のまくらことばの

名細をとったと思われる。

■ 名細(なくわし) 名がうるわしいよい名である

名付け親は歌人。神主の小島平氏と言われている。

以上鯨井史より抜粋 昭和58年3月31日 発行